

日本 戦闘の 者



荒谷卓（あらや たかし）
生年月日：昭和34年秋田県出身
略歴：昭和53年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職（1等陸佐）。海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。
平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。
平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会：熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める
著書：『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ』『特殊部隊vs.精鋭部隊—最強を目指せ』並木書房／『自分を強くする動かない力』三笠書房
熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス
<https://musubinosato.jp/>

034

国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里
代表：荒谷卓



自衛隊を退職した俺は、現職自衛官時代にできなかった北朝鮮による日本人拉致問題に取り組むため、平成20年に荒木和博氏等と立ち上げた「予備役ブルーリボンの会」の活動に本格的にかかわった。俺は、現役当時、国際テロ対策会議に参加したおり、「日本政府が国際社会に自国民の拉致被害を積極的に公表しているが、自国による救出行動はなぜとらないのか」とたびたび質問された。グリーンベレー留学時も、この話になるとよく言われたのが、「北朝鮮が日本領土から多くの日本人を連れ去ったのはひどい話だということに同意はできるが、それを何度も許し、その事実を知っていながら何もしないことの責任の所在は日本自身にある」ということだった。

北朝鮮の元工作員であった安明進と直接話して聞いたところ、北朝鮮の朝鮮労働党中央委員会直属政治学校の工作員教育では、実習科目として日本に潜入して日本人を拉致していたという。何故ならば、日本は警備がほとんどないに等しいので、とても潜入しやすく、仮に失敗して日本の警察に捕まっても、すぐに開放して北朝鮮に帰してくれるからだそう。つまり、安心して拉致実習ができるということだ。ふざけた話だ。

一般的に、外国からの主権侵害行為、例えば航空機や船舶の領空領海侵犯等に対しては、排除能力を有する国は直ちに実力を行使して排除するが、排除能力を持たない国は、自国の領空領海が侵犯されてもその事実を公表しない。なぜなら、主権を侵害された事実を表明しておきながら対抗措置を行使しないということになれば、それは自国に主権を保全する能力がないか、能力があっても主権を保全する意思がないということを知国内外に知らしめることにしかならないからである。領域主権は絶対主権として国際条約によって規定されているが、それはあくまで、当該国の権利であって、その権利を行使するかどうかは、その国の意思と能力に

かかわる問題である。日本の場合、能力がないわけではないが、領土と国民と主権を保全する毅然たる意志がないので、領空領海侵犯を何度でも繰り返される。拉致問題も同じだ。拉致問題は、イラクで起きた誘拐人質交渉と同様、基本的に当事者間の問題である。北朝鮮側に拉致問題の解決を強制できる国際システムは存在しない。日本が主権国家として、その権限を行使するかどうかという意思の問題である。しかし、政府の方針は、「北朝鮮に、拉致被害者全員の一刻も早い帰国をはたらきかける」というものである。自分の意思の問題であるにもかかわらず、相手の意思に期待するというものだ。北朝鮮のふざけた行為に、何も具体的な手を打たない日本は、与えられた主権保全の権利の遂行を自ら放棄しているのだ。

俺は、拉致問題に長く関わっている荒木和博氏と舎弟の伊藤祐靖氏にも声をかけ、日本政府に拉致問題解決をお願いするのではなく、国民主導でこの問題の解決を図るべく活動を始めた。

まずは、独自に関連情報を入手することが必要である。そこで、予備役ブルーリボンの幹事及び会員に、北朝鮮関連の地誌、水路図・海図、気候・気象、自然環境・植生・土質、政治、行政、司法、施設、産業、放送・電波、交通、軍事、空港・港湾、エネルギー、医療・衛生、歴史・文化、言語、人物、そして拉致被害者の所在地等々の情報収集担当を割り当てた。また、そのための情報ソースの開拓にも努めた。また、情報収集の対象地域は北朝鮮だけではなく、日本国内に拉致を遂行し支援している組織や人物が大勢いるので、そちらの情報収集も必要である。そして、こういう活動を始めると決まると、警察や自衛隊の自衛隊の情報保全隊等がマークするので、そちらへのカウンター情報活動も必要になってくる。

次に、実際に北朝鮮工作員が、どのようにして日本人を日本国土から拉致したのかの手口を研究する為、日本人拉致のシミュレーションを行った。日本領土への上陸潜入から、日本に所在している拉致協力者との連携要領、拉致するターゲットの選定、実際の拉致行動、拉致者の隠匿から北朝鮮への連れ出し、



荒谷卓
RBRA顧問
陸上自衛隊特殊作戦群初代群長
明治神宮武道場「至誠館」館長

シンポジウム「予備役ブルーリボンの会」の動画からの画像。筆者（右）と、田母神俊雄氏（左）。



筆者の発言を聞く伊藤祐靖氏（右）。



自衛隊経験者および予備自衛官の集まりである予備役ブルーリボンの会は、北朝鮮から日本人拉致被害者の奪還を視野に入れ、あらゆる方向から実現へと努力を重ねていく。

事後処理等一連の拉致行動を実際に行い記録して整理した。さらには、拉致行動をする北朝鮮グループとその行動に対処する情報及び対処作戦グループに分けての対抗作戦シミュレーションも実施した。

そして、これらの研究成果を拉致議連の国会議員に説明し、予備役ブルーリボンの会のシンポジウムを開催して一般国民にも情報提供した。

このシミュレーションは、現役時代から取り上げてみたかったものである。日本への特殊潜入自体は、特殊部隊の訓練としてはあまり意味を成さないが、そのようなシミュレーションを政府関係者あるいは政治家に視覚的に伝えることにより、通常の状態としてなすべき対策を促したかったからである。

それ自体が特殊部隊の訓練として意味を成さないというのは、日本に対する潜入・拉致があまりにも簡単すぎるからである。1コ連隊ぐらいいがっちり固める海岸に潜入して、襲撃や破壊作等直接行動を取るようなシナリオなら訓練になりうるが、完璧に無防備な日本の海岸に上陸潜入する行動は簡単すぎて訓練の対象になる要素がみあたらない。つまり、日本領土での侵入・拉致はそれほど容易なことである。

さらには、国内に極めて多数の協力者が存在し、この者達が工作員の潜入から拉致・北朝鮮への輸送を担っているのだから、こちらが作戦の主体であり、潜入してくるのはお客様みたいなものだ。日本国内にはスパイと呼ばれる外国への協

力者が野放しである以上、不法侵入も拉致もやり放題である。

日本の全ての海岸線を不法侵入から物理的に守ることは困難だが、そうした不法侵入者やそれに対する援助者を殺傷あるいは逮捕する実例を示すだけで、状況は一変する。つまり、相手にとっては、リスクがゼロである現状が30%のリスクを負うことになるだけでも、常にそのリスクをカウントしなければならなくなるから、拉致実行は相当に慎重にならざるを得ない。また、そのためには、より高度な訓練や資器材が必要となりコストがかさむことになる。現在は、侵入・拉致あるいはそれに協力する側にとって、リスクも無ければコストもかからない状態だ。失敗しても、全く問題が生ぜず、「次はうまくやろう」といった程度だろう。まずは、この状態を解消しなくてはならない。

拉致問題解決が多くの国民の支持を得ている今の状況で、これに反対を唱える者は外国勢力の傀儡か協力者であることぐらい誰の目にもわかるだろう。とりえず、誰が外国勢力の傀儡で協力者であるのかを国民の目前に浮き彫りにするために、あらためて「拉致問題解決のためのスパイ防止法」あるいは「拉致防止のための領域警備法」等国会で審議するのがいい。

次に実施したのが、自衛隊による拉致被害者救出作戦のシミュレーションである。政府も国会議員も、はなから自衛隊による拉致被害者の救出などそんなことはできないとして、拉致問題解決のオプ

ションから自衛隊の活用は排除している。そして、外交でだめならもう終わり。あとは、ブルーリボンパッチをつけて北朝鮮を批判して、国民には頑張っているふりをするだけの「やるやる詐欺」で終始する。こんなことでは、この問題は一步も前に進みはしない。

さいわい、予備役ブルーリボンの会には、元陸上自衛隊特殊作戦群の俺と元海上自衛隊特別警備隊の伊藤祐靖氏がそろっているの、人質救出作戦に関してはプロとしての知見がある。軍事的にどうすれば拉致被害者の救出作戦が遂行できるかのシミュレーションはお手のものだ。陸・海・空自衛隊の持てる能力を活用すれば、拉致被害者の救出は可能であるということはいくつかのパターンでシミュレートした。もちろん、単純に、作戦が可能か不可能化だけではなく、仮に作戦が可能としても、これによって生じる政治的リスクについても分析した。そして、作戦を実行する場合、作戦部隊指揮官と政策決定者間で、政治的リスクの許容範囲、処置対策の妥当性等について事前に認識を共有するための政軍関係メカニズムの在り方等についても検討し、その成果を国会議員等に提言した。最近では、伊藤祐靖氏が「邦人救出—自衛隊特殊部隊が動くとき—」（新潮社刊）という本を書いて、そのシミュレーションの一部を小説として紹介している。

この自衛隊による拉致被害者救出作戦の内容を、予備役ブルーリボンの会の公開シンポジウムで紹介した際に、拉致被害者のご家族から「うちの家族のために、自衛隊の皆様が犠牲になるようなことがあっては申し訳ない」というお話を伺った。俺は即座に答えた。「俺らは、そのために存在するプロの集団です。もし、救出作戦で俺らの誰かが死んだとしたら、それは、俺らがプロとして実力不足だったということですよ。拉致被害者の方やそのご家族が心配する必要はありません。日本人を救出する作戦を遂行出来ることは、俺たちにとって名誉なことですから」と。

035